

たにざき じゅんいち ろう

# 谷崎潤一郎

文学译介研究

尹永顺 / 著



四川大学出版社

### 作者简介

尹永顺，日本神户大学博士（学术），电子科技大学日语系教师，主要从事谷崎润一郎作品以及日本文学的译介研究，已在国内外学术刊物上发表论文数篇，主持省部级项目以及其他项目4项。

たにざき じゅんいち ろう

# 谷崎润一郎

文学译介研究

尹永顺 / 著



四川大学出版社

2015年中央高校科研基本业务费项目《东北沦陷时期日本文学译介研究》  
(A03012023801127) / 2017年四川省教育厅人文社会科学重点研究基地四川外国语言文学研究中心《日本唯美派文学译介史研究》(SCWY7-29) / 2018年四川省社会科学“十三五”规划外语专项《日本唯美派文学与中国关系研究》(一般项目, SC18WY015)的阶段性成果。

# 目 次

第 1 章 序 論	( 1 )
1. 1 研究背景と研究方法	( 1 )
1. 2 本研究の構成	( 4 )
第 2 章 理論的枠組み	( 7 )
2. 1 ポリシステム	( 8 )
2. 2 記述的翻訳研究	( 9 )
2. 3 リライト理論	( 10 )
2. 4 本研究の視点と概念規定	( 16 )
第 3 章 谷崎潤一郎の作品について	( 21 )
3. 1 作品の特徴	( 22 )
3. 2 谷崎潤一郎と中国	( 25 )
第 4 章 1924—1943 年の谷崎文学の翻訳	( 28 )
4. 1 社会・文壇の事情	( 29 )
4. 2 翻訳概要と序にみる谷崎文学	( 34 )
4. 3 評論と日本文学史教材における谷崎文学	( 47 )
4. 4 事例研究 1: 戯曲『無明と愛染』の翻訳と上演	( 54 )
第 5 章 1980—1992 年の谷崎文学の翻訳	( 74 )
5. 1 社会・文壇の事情	( 77 )
5. 2 翻訳概要と序にみる谷崎文学	( 80 )
5. 3 研究論文と日本文学史教材における谷崎文学	( 89 )

5.4	事例研究2：長編小説『細雪』の翻訳	(93)
第6章	1993—2013年の谷崎文学の翻訳	(110)
6.1	社会・文壇の事情	(110)
6.2	翻訳概要と序にみる谷崎文学	(113)
6.3	研究論文と日本文学史教材における谷崎文学	(118)
6.4	事例研究3：長編小説『鍵』の翻訳	(122)
第7章	『春琴抄』の翻訳と影響	(134)
7.1	『春琴抄』の翻訳	(134)
7.2	『春琴抄』の影響—李修文を例に—	(146)
第8章	結 論	(159)
8.1	まとめ	(159)
8.2	今後の課題	(164)
	参考文献	(166)
付録	中国語訳一覧(1924—2013年)	(182)

# 第1章 序 論

## 1.1 研究背景と研究方法

谷崎潤一郎（1886－1965）の作品が初めて中国語に翻訳されたのは、1924年に中国語新聞「盛京時報」に連載された『麒麟』（1910）である。それ以降、数々の作品が中国語に翻訳されてきた。1920年代から現在に至るまでの軌跡を振り返って見ると、中国における谷崎文学の評価と位置付けは時代によって大いに異なると言えよう。耽美主義的特徴が評価され、小さな翻訳ブームが起こった時期があれば、反抗文学や現実主義的要素が探り出された時期もあった。今や「女性崇拜」と「マゾヒズム」が作品を解くキーワードだと定評のある名作『春琴抄』（1933）が、1980年代では「人は努力すれば有用な人間になれる。芸人は試練を受けないと芸術の真髄が悟れないという道理を強調した」と解釈された。『春琴抄』だけではなく、1980年代では谷崎潤一郎のほかの作品及びほかの日本人作家の作品にも社会的教化の側面が掘り下げられる傾向が見られた。外国文学の翻訳と受け入れ方はそれが行われたコンテキストに左右され、どの作品を翻訳対象として選定するか、どのように解釈するか、どの側面に注目するかが決められる。

谷崎潤一郎はノーベル文学賞の候補にまで挙げられた日本人作家だけあって、日本だけではなく、中国の日本文学研究者の間でも広く研究されてきた。中国と関わる研究では、1920年代を中心に谷崎潤一郎の中国旅行、中国趣味、中国文壇との交流とその影響の視点から論じられたものが目立つ。趙（1997）は、反俗・伝統回帰・東洋人の悲哀の3点を引き出し、周作人と谷崎潤一郎、永井荷風との文芸思想の交流、及び文学上共感を覚えた理由を明らかにした。解（1997）は1920-1930年代を中心に耽美主義的傾向にあった中国文学を論じる際に西洋、日本の耽美主義の伝来とその影響を研究視野に入れ、日本は永井荷風と谷崎潤一郎の翻訳概要と受け入れ方に言及された。張能泉は谷崎文学と中国との関係に早くも注目し、田漢、郭沫若、欧陽予倩を中心に谷崎潤一郎との交流と影響を検討した一連の論文を発表してきた（張 2006a/2006b/2007/2008/2013）。近年の研究成果には金（2013）がある。中国の民国期における谷崎文学の受容と影響を郁達夫、施蛰存、章克標を中心に比較文学的視点から考察し、谷崎潤一郎の2回にわたる中国旅行と中国観の変遷、及び翻訳概要が述べられた。

一方、日本では谷崎研究が盛んに行われており、優れた研究成果も数多く生み出されたものの、中国関連の研究は少ないと言えよう。真っ先に中国との関係に注目して研究したのは西原（1998）である。西原（1998）はオリエンタリズムの視点から谷崎潤一郎の中国観の形成と変化を、作品や旅行体験、中国の知識人との交流など大量の一次資料から詳述し、それ以降の研究に役立ってきた。

以上のように、谷崎文学と中国との関係に注目した先行研究が多数見られ、翻訳にも言及されたが、ほとんど翻訳概要を提示する段階にとどまっており、翻訳に重きを置いた研究は少な

いといえよう。管見の限りでは、『春琴抄』に登場する「三味線」と「雨戸」の中国語訳を比較検討したもの（張 2010）、翻訳者が『少将滋幹の母』を翻訳した心得を述べたもの（王 2001）が検索された。翻訳テキストについて込み入った分析と考察、さらには谷崎文学の翻訳を通時的、系統的に扱った研究はまだ見当たらず、検討する余地があると言わざるを得ない。

また、これらの先行研究は中国における谷崎文学の受け入れ方を論じる際に中国の伝統的な文学観に照らしてそれぞれ異なる時期に行われた翻訳を考察し（銭 2002）、時代ごとに現れた特徴に注目せず（于 2007、蔡 2008）、政治イデオロギーの影響により左翼文学の影響を過大評価する傾向が見られ（王 2000、張 2007）、時代の変化への注目や社会背景の確定などまだ様々な課題が残されたと考えられる。例えば、1920年代後期から国際都市として注目を浴びた上海には左翼文学を含む多様な文学形態と文学団体が共存していた。左翼文学は氣勢が大きかったが、主潮ではなかった（秦 2005）。さらに、1920年代の中国では上海、東北地方のように地域ごとに状況が異なっていた。したがって、本研究では中国全土を背景にして一概に論じるのではなく、時代によっては谷崎文学が翻訳された地域差も視野に入れ、谷崎文学の翻訳が中国で受け入れられる際に中国の社会文化的文脈とどのような関係を持ったのか、またその過程において翻訳者や出版関係者がどのようにつなぎ役を果たしたのかを検討する。

翻訳界では、翻訳実践が盛んに行われるにつれ、実践を踏まえた理論的展開も進められ、翻訳実践のための理論的根拠を提供した。1970年代以降、翻訳とそれを取り巻く社会文化的文脈との関係に注目した「文化的転向（cultural turn）」派が登場した。従来の言語レベルで翻訳を研究する起点テキスト志向



から、翻訳が行われたコンテキスト、文化に注目する目標テキスト志向へと関心に移る傾向が見られた。そのうち、操作派を代表する翻訳理論家ルフェーヴル（Lefevere）はイーヴン＝ゾウハー（Even-Zohar）のポリシステムとトゥーリー（Toury）の記述的翻訳研究を発展させてリライト理論を提案した。リライト理論は翻訳を起点テキストに対する書き換え（rewriting）であると指摘し、書き換えを左右する要素としてイデオロギーと詩学を取り上げた。さらに、書き換えには翻訳以外に、編集、史料編纂、選集編纂、批評などの形態が含まれると主張し、翻訳を大きなコンテキストと関連付けて幅広い視点から検討した。リライト理論は本研究の主旨を論証するのに最も適切であると考えられる。

本研究は中国の時代背景と谷崎文学の出版状況を踏まえて、谷崎文学の翻訳を三つの時期に分ける。まず、ルフェーヴルのリライト（rewriting）理論を援用しつつ、翻訳状況の有り様を概観し、各時期の社会情勢と文学事情を確認した上で翻訳された作品の特徴をまとめる。次に、翻訳者や研究者の序、評論、論文、日本文学史教材における評価を分析し、谷崎文学がどのように解釈され、どのように位置づけられたのかを考察する。さらに、三つの時期からそれぞれ代表作を1作ずつ取り上げ、社会情勢と文学思潮が作品の選択と翻訳方略に与えた影響を検討する。最後に、最も翻訳回数が多かった代表作『春琴抄』の中国語訳を取り上げ、翻訳方略の変化を確認し、中国の若手作家李修文の長編小説『滴泪痣』に与えた影響を検討する。

## 1.2 本研究の構成

本研究は序論と結論を含め、八つの章から構成される。

第1章の序論では、今までの先行研究を踏まえ、本研究の研究背景と研究方法を紹介し、本研究の構成を概観する。近年、谷崎文学の研究は増えているものの、翻訳の視点から扱った研究は少なく、様々な課題が残された。本研究は翻訳に注目しつつ、中国における谷崎文学の翻訳と受容の全体像を描き出すものである。

第2章では、本研究の理論的枠組みとなるルフェーヴルのリライト理論を紹介する。リライト理論は翻訳を起点テキストに対する書き換えであると主張し、書き換えを左右する要因としてイデオロギーと詩学を取り上げた。本研究はリライト理論を援用するが、この理論に関する様々な批判を受け、本研究における視点と概念規定を再検討し、具体的な研究の進め方を提示する。

第3章では、本研究の研究対象となる日本耽美派作家谷崎潤一郎とその作品を紹介する。まず、谷崎潤一郎の文学的活動と特徴を概観し、中国との関係、及び中国旅行が谷崎文学に与えた影響を考察する。

第4章から第6章までは、中国における谷崎文学の翻訳を、1924年—1943年（第一時期）、1980年—1992年（第二時期）、1993年—2013年（第三時期）<sup>①</sup>と三つの時期に分けて考察する。各時期の社会情勢と文学事情を確認した上で、それとの関係から谷崎文学の翻訳状況を概観し、さらに、序、評論、論文、日本文学史教材における評価を取り上げ、中国での谷崎文学の受容のあり方を考察する。ルフェーヴルは書き換えの諸形態で翻訳に重きを置いたため、本研究も翻訳に焦点を当てる。

---

<sup>①</sup> 本研究は2013年に神戸大学に提出した博士論文を修正したものであるため、第三時期は2013年までとする。

三つの時期から代表作を1作ずつ取り上げ、翻訳者の（もしくは、支援に押し付けられた）イデオロギーと詩学がどのように翻訳方略を左右したのかを検討する。第1時期は戯曲『無明と愛染』を取り上げ、当時の社会情勢と文学事情との関係から戯曲の選定要因、上演の目的、上演のための翻訳方略を検討する。第二時期は長編小説『細雪』を取り上げ、序から読み取れる翻訳者のイデオロギーがどのように翻訳を介して主人公の人物像を書き換えたのかを考察する。第三時期は、性を扱った作品として論争的となった長編小説『鍵』を取り上げ、翻訳者のイデオロギーがどのように性にかかわる表現の翻訳方略を左右したのか、また翻訳者のイデオロギーはどのように社会情勢の変化とともに変わるのかを考察する。

第7章では、三つの時期にわたって翻訳され、高く評価されてきた代表作『春琴抄』を取り上げ、同一作品でもイデオロギーと詩学の変化により翻訳方略が異なることを実証する。時代背景が大いに異なる1939年の穆儒丐訳と2007年の鄭民欽訳を取り上げ、漢字語彙と慣用句を中心に翻訳方略を検討し、その時代のイデオロギー、詩学との関わりを解明する。『春琴抄』は中国の若手作家李修文に影響を与え、李修文の長編小説『滴泪痣』に作中作として現れる。この2作品を文学創作における位置づけ、物語の提示方法と展開、主題の視点から比較し、『春琴抄』が『滴泪痣』に与えた影響を検討する。

第8章の結論では、これまで述べてきた内容をまとめ、今後の課題を提示する。

## 第2章 理論的枠組み

本研究はルフェーヴル（Lefevere）のリライト（rewriting）理論を理論的枠組みとして援用する。ベルギーの比較文学研究者・翻訳理論家ルフェーヴルにより考案されたりライト理論は「文化的転向（cultural turn）」の最も重要かつ代表的な翻訳理論である。「文化的転向」とは、言語を超えて、翻訳を歴史、コンテキスト、慣習など大きな問題に注目し、翻訳と文化との相互作用に焦点を当てた研究である（マンデイ2009：196）。ルフェーヴルは、文学テキストの受容、容認、或いは拒否を支配する要因として、権力、イデオロギー、制度、操作などの問題に焦点を当てた（Lefevere 1992：2）。

ルフェーヴルのリライト理論を理論的枠組みとして援用する理由は以下の通りである。中国はイデオロギー的色彩が強い国であり、中国における翻訳と創作は西洋人が考えるような純粋な美的活動にはなりえない（何2005）。中国における20世紀の文学翻訳史を振り返って見ると、文学翻訳は主に政治的目的と文学発展の需要を満たすために行われたが、全体的な傾向としては政治的目的を満たすためのものが多かった（査・謝2000：87-88）。また、リライト理論は翻訳だけではなく、編集、批評、選集編纂、史料編纂などを書き換えの形態として扱っているため、中国における谷崎文学の翻訳と受容のあり方をより広

範な視点から検討するのに最適であると考えられる。

リライト理論はポリシステムと記述的翻訳研究を土台として発展させたものであるため、次節では、まずポリシステムと記述的翻訳研究を簡単にまとめる。

## 2.1 ポリシステム

1970年代初期、イスラエルの研究者イーヴン＝ゾウハー（Even-Zohar）はロシアの文学理論を踏まえてポリシステム（polysystem）を考案した。ポリシステムとは、異質な要素から成り立つ階層的なシステムの集合体のことである。ある国の文学のポリシステムは、芸術、宗教、政治などのポリシステムと共に、より大きな社会文化的なポリシステムを構成する要素である。ポリシステムを構成する各階層は互いに支配的な位置をめくり絶えず競っている。文学のポリシステムの場合では、文学のそれぞれのジャンルがすべて支配的な位置を求めて競うため、中心部と周辺部の間には緊張関係が常に存在する。翻訳文学はポリシステムの中で通常周辺的な位置を占めるが、以下の三つの場合中心的な位置を占めることができる。

1) 「若い」文学が成立しつつあるが、まだポリシステムを形成していない状態。

2) 小国の文学が他の大国の文学に圧倒されているような場合。

3) 文学の危機的時点、或いは一国の文学が真空状態にある時である。

文学ポリシステムにおける翻訳文学の位置がどのような翻訳方略を用いるのかを左右する。翻訳文学が中心的位置を占めると、翻訳者は目標文化内の既存の文学規範を破壊するような異

化的な翻訳を行う。逆に、翻訳文学がポリシステムで周辺的位置にあれば、翻訳者は目標文化の既存の文学規範に倣って同化的な翻訳を生み出す (Even-Zohar 1978/1990: 192-197)。

## 2.2 記述的翻訳研究

イーヴン＝ゾウハーと共に研究したイスラエルの翻訳学者トゥーリー Touryは、ポリシステムの影響を受け、目標言語志向の記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies) を発展させた。記述的翻訳研究では起点テキストと目標テキストの間の等価は既に想定されており、その想定された等価がどのようにして実現したのかを記述する (マンデイ2009: 176)。

トゥーリーは規範 (norms) の概念を提案し、記述的翻訳研究のための道具として扱った。規範はある文化、社会、時代に固有の社会文化的制約である。翻訳とは規範に支配された活動であり、規範が実際の翻訳に現れる等価を決定すると考える。翻訳プロセスの様々な段階において異なる規範が作用している (Toury 1995: 57-61)。

まずは、特定の時代で翻訳作品の選択を決める要因となる予備的規範 (preliminary norms) である。次は、翻訳者が起点テキストと目標テキストとの間で行った一般的な選択に関わる初期規範 (initial norms) である。初期規範のもとで、翻訳者は起点文化、言語の規範と目標文化、言語の規範の間でどちらに従うのかを決める。最後は、翻訳プロセスで実際の選択を行う運用規範 (operational norms) であり、翻訳行為のミクロ的選択に関わる (同上: 57-61)。

以上のように、ポリシステムと記述的翻訳研究は言語レベル、起点テキスト志向であった伝統的な翻訳研究を打破し、目

標テキスト志向のマクロ的な翻訳研究に注目し始めた。しかし、ポリシステムは、比較的少ない根拠に基づく過剰一般化から、翻訳の「普遍的法則」を求め、記述的翻訳研究は起点テキストと目標テキストのマッピングがその場限りのものであるという批判を招いた（マンデイ 2009：170—179）。さらに、徹底した目標テキスト志向は、翻訳を取り巻く複雑な状況の多様性を単純化しすぎて、翻訳における価値観の役割や翻訳がもつ政治的・イデオロギー的影響が見落とされていることが批判的となった（Asimakoulas 2009：241—245）。

### 2.3 リライト理論

以上のポリシステムと記述的翻訳研究を発展させたのがルフェールのリライト理論である。

ルフェールによれば、「翻訳はもちろん起点テキストの書き換え（rewriting）である。すべての書き換えはその意図を問わず、特定のイデオロギーと詩学を反映し、特定の社会で何らかの方法で機能するように文学を操作する。書き換えは操作であり、権力に奉仕する」（Lefevere 1992：VII）。

翻訳のほかに、同様な書き換えの基本的なプロセスは史料編纂、選集編纂、批評、編集などでも行われる。そのうち、翻訳は誰が見てもはっきりと分かる書き換えの典型である。翻訳は作者やその作品のイメージを、オリジナルの文化の境界を超えて映し出すことができるため、最も大きい影響力を秘めている（同上：9）。オリジナルの作品が読めない読者にとって、翻訳はまさにオリジナルそのものである。翻訳はオリジナルのために特定のイメージを映し出し、特定のイデオロギーに奉仕し、オリジナルより多くの読者に影響を与えることができる（同

上：42)。

ルフェーヴルの言う書き換えとは、冷酷、無節操、狡猾なリライター（翻訳者、批評者、史料編纂者、編集者、選集編纂者など）がオリジナルを「裏切った」ことを忍び笑いすることではない。それとは逆に、リライターはその多くが細心、勤勉、博識、正直であり、自分のやっていることが当たり前なこと、唯一の方法だと考えている。リライターには選択の余地がないか、自分が反逆者であることに気づいていない場合が多い（同上：13）。

### 2.3.1 イデオロギーと詩学

ルフェーヴルは、翻訳により映し出された文学作品のイメージを左右する要素を二つ取り上げた。

まずは翻訳者のイデオロギー（ideology）であり、これは翻訳者自身が認めたものであったり、または支援により課せられたものであったりする。支援については次節で詳しく述べるが、簡単に言うと、翻訳者がある作品を選定し、翻訳することを促進したり、妨げたりする権力のことである。通常翻訳者は自分のイデオロギーに背馳する作品を翻訳しようとししない。そのため、常にオリジナルと異なる自分のイデオロギーへの執着と、この翻訳が適切であることをほかの翻訳者に納得させようとするプロの翻訳者としてのステータスの板挟みになる。オリジナルのイデオロギーが翻訳者自らのイデオロギーと相いれない場合、翻訳者は削除、追加、シフトなどの方略を講じ、オリジナルが自らのイデオロギーに合うように操作する。つまり、翻訳者は翻訳テキストを通じて自分のイデオロギーを表現する（同上：44－45）。

イデオロギーの定義について、ルフェーヴルは政治的な領域



に限定されず、我々の行動を秩序付ける形式、慣習、信条の絡み合ったものであり（同上：16）、また特定の時代の特定の社会において受容可能だと思われる考え方と態度から成る概念網である（Lefevere 1998：48）。

イデオロギーは翻訳者が使用する基本的な方略、及びオリジナルの言語と言説領域により提示された問題の解決策を決定する。言語について、ルフェーヴルは起点言語と目標言語との差異、及びその時代に支配的な詩学とイデオロギーなどが規定する様々な言語的なシフト（例：方言）を取り上げた。言説領域とは、オリジナルの作家に詳しい世界に属する対象物、概念、習慣のこと（例：文学的引喩）である（Lefevere 1992：41）。

次に、翻訳が行われた特定の時期に目標文学において支配的な詩学（poetics）がある。

詩学は2要素から成る。一つは、文学装置、ジャンル、モチーフ、プロトタイプ的な人物像もしくは状況、シンボルなどの項目が含まれる。もう一つは、文学が社会システム全体においてどのように機能するか、もしくは機能すべきかという概念である。後者はテーマの選択において重要な役割を果たし、ある文学作品が世間に注目された時点で社会システムと繋がり、詩学領域外のイデオロギー的影響と密接に関わる。詩学の項目的要素はシステム環境から直接影響を受けることはないが、機能的要素はシステム外から直接影響を受ける。そのため、機能的要素は変わりやすく、それに伴って項目的要素も変わっていく（同上：27-34）。

以上をまとめると、イデオロギーとは社会はどんなものであるか（べきか）に関わるものであり、詩学とは文学はどんなものであるか（べきか）に関わるものである。翻訳プロセスのすべてのレベルで言語学的な考察がイデオロギーや詩学的な特質